

ミ ツ バ (露地) (黒ボク土)

(土壌肥料)

本作目は、栄養生長型であり窒素を中心に養分を連続吸収する。収穫まで養分を供給する必要があり、収穫後の土壌には養分が残存しやすい。根は大部分は軟らかい地表部分に集中し、吸肥力は弱い。このため、作土層が軟らかく、通気性の良い有機質に富んだ土壌を好む。品質や収量等に窒素の施肥時期や施肥量が関係する。カリについても窒素同様に考え、土壌中にあまり残存しないように注意する。

(病虫害・雑草防除)

根株養成では連作を避ける。播種後寒冷紗被覆を行いフタテンヒメヨコバイの媒介によるてんぐ巣病の発生を予防すると共に他の害虫の被害を避ける。根株は厳選して無病虫株を軟化に用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点にたった投入量管理を行う。 緑肥作物を利用する。	堆肥(年間) 2~3t/10a
化学肥料 低減技術	基肥は、畝内のみの局所施肥とする。 肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせ、養分吸収に対応した施肥成分の供給を行う。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で施肥基準以下 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20~50%
化学農薬 低減技術	微生物農薬を利用する。 (対象:灰色かび病) B T剤をローテーション散布に位置づける。 (対象:ハスモンヨトウ、ヨトウムシ) フェロモン剤による発生予察、誘殺を行う。 (対象:ハスモンヨトウ、ヨトウムシ) 寒冷紗被覆を行う。 (対象:ヒメフタテンヨコバイ・てんぐ巣病) 機械による中耕・除草する。	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	有機質肥料は、遅くとも播種20~30日前までに施肥し、分解を促進させておく。 優良有機物資材施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 黒ボク土ではリン酸吸収係数が高いのでリン酸欠乏に注意する。 土壌の加湿により生理的に根腐れを起こしやすいので、灌水に注意する。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。	